

## 畜産県としての使命

鹿児島大学教育学部附属小学校 5 年 田方 華

わたしは「報道記者体験」の中で、鹿児島大学農学部共同獣医学部を見学・取材しました。

その時学んだことや見たことを、報道原稿風にまとめてみようと思います。

鹿児島県の曾於市財部町にある、南九州畜産獣医学拠点「SKLV（スクラブ）」こちらでは、獣医師を目指す学生たちが実習や研究などを行っています。

「産業動物獣医師」と呼ばれる、牛や馬、ニワトリといった畜産業に関わる獣医師は全国的にも少なく、産業動物の健康だけでなく、飼育している農家の方の経営や、安全で良質な食料としての畜産物の供給にも深く関わっています。

畜産王国である鹿児島県では、とくに重要な役目を担っています。

その中でも、特に馬の獣医師は獣医師全体の 10%、300 人ほどしかいません。

「馬」と聞くと、「サラブレッド（競走馬）」や「乗用馬」といった馬が有名ですが、全国には 8 種類の「日本在来馬」がいます。

鹿児島県の天然記念物に指定されている「トカラ馬」の研究に携わる山下紀幸獣医師によると、

「SDG s と馬は深い関係がある」

といいます。

日本の在来馬は4世紀末ごろ、モンゴルから伝わったという説が有力です。

日本で広がった在来馬は、どれも体が丈夫で、ぜいたくなエサも不要なうえに、性格もおとなしく賢いことが特徴です。そのため、移動するための乗用馬や荷物を運ぶ馬車馬、また、田畑を耕したり農産物を運んだりする農耕馬として、馬は人々の生活に欠かすことのできない大切な存在でした。

けれども明治時代からあと、車や鉄道の普及、農業の機械化などにより在来馬は働く場を失い、現在では人間が保護しなければ品種を残すのは難しくなったのです。

日本がこれまで歩んできた歴史や文化の一角を今に伝える在来馬。

彼らを守っていくことは、SDG s の中の15番目の目標「陸の豊かさを守ろう」につながります。

獣医師の診察は、人間と同じように、問診や聴診が行われます。

厩舎で一頭一頭名前を呼んでいく山下医師。馬の表情はわたしには変わったようには思えません。けれどもごはんを食べている途中でも、名前を呼ばれた馬はそちらを向きます。機嫌が悪いと耳を曲げてペタンコにしたり、みんながおしゃべりを始めると一緒になっておしゃべりをするように鳴いたりします。そういった細かな部分をしっかり観察して、馬の状態を見極めることはとても大切なのだと教えてもらいました。

わたしたちの身近に存在する、犬やネコといったペットとは診察方法も異なります。

いちばん驚いたのは、状態が悪い馬のおなかを検査するときに、馬のおしりに直接手を入れて、直腸越しに触診するということです。身体が大きいためレントゲンはとれません。聴診器を使うこともありますが、より正確に検査するためには大事な検査だと思っています。

日本有数の畜産県である鹿児島県。動物たちを、そして畜産業に携わる方々を守る家畜のお医者さん。

動物を人々の暮らしと幸せを守るために、今日も奮闘しています。